

【論文】

「慈善学校運動」とキリスト教知識普及協会
——M・G・ジョーンズ『慈善学校運動』（1938）
以後の研究をふまえて

鶴見良次

はじめに

イギリス教育史において、18世紀はしばしば「慈善学校運動」の時代と呼ばれる。これらの学校では、貧しい家庭の子供に無償で読み書き算数などの教育が与えられたほか、制服などの学校生活の必需品が支給された。下段で論じるようにそれらをすべて「慈善学校」(charity school) という名称で括ることの是非はともかく、M・サンダソンの『教育と経済変化—1780-1870年のイングランド』（1991）におけるように、その「運動」が18世紀半ば過ぎまでの識字率の上昇に関係するとの見方もある。慈善学校の全貌に関する最も重要な文献である『慈善学校運動—18世紀ピューリタニズムの実践』（1938）の著者M・G・ジョーンズは、その盛んな学校建設をピューリタニズムの新しい展開あるいは運動としてとらえた¹⁾。そして宗教復興を背景にその「運動」を全国規模で組織的に推し進めたのが英国教会系の宗教教育促進組織であるキリスト教知識普及協会（The Society for Promoting Christian Knowledge、以後、SPCKと略記）であるとするのが慈善学校史に関する基本的な理解である。ジョーンズ以後、ことに1970年頃からは慈善学校とSPCKとの関係について、地域の事情などをふまえたより詳細な研究も現れるようになった。本稿では、慈善学校の設立やその教育活動におけるSPCKの役割を、おもな慈善学校史研究を紹介しつつ概観する。

慈善学校の経営

17、18世紀の英国教の教会区牧師は、週日の日課や祝祭日の務めのほかに、教区民の生活のさまざまな面倒をみたり、教理問答の指導をするほか、子供を集めてリーディングや噛み砕いたやさしい教理問答を教えた。私財を投じて小さな学校を開くこともあった。リテラシーを持たない庶民の子供たちのための基礎的な読み書き教育は、多くの場合、各教会区の聖職者が兼任する教師が担っていた。司祭の私財と遺産で運営される小規模な教育施設もあったが、多くの学校は教会区の篤志家らによる出資によるものであった。具体的には、管財人に運用を信託する寄付基金 (endowment)、遺贈 (bequest)、会費制寄付 (subscription)、および一般の募金などによる。慈善学校の資金調達方法についてはセアラ・ロイド『1680-1820年頃のイングランドにおける慈善と貧困』(2009)、柘植秀通「英国慈善学校の組織化特性に関する研究(その2)」(2014)にくわしい²⁾。18世紀に建設されたこれらの学校は資金のあり方から一般に慈善学校と呼ばれた。もちろんロンドンをはじめとする都会にははるかに規模の大きな学校が数多く建設された。生徒数100名を超える学校も少なくなかった。その場合は専任の教師が雇われた。ロンドンの教師には年俸30ポンドのほか住居費と燃料代が支給された。感謝祭日などに、ロンドン中の慈善学校生徒がセント・ポール寺院などの礼拝に一齐に参集することが年一度の恒例行事となっていた。各教会区の典礼係に先導されて、数千人の生徒が行列をなして行進したという³⁾。いずれにしても、イギリス近代の民衆学校教育はおもに英国教会の教会区を単位とした慈善資金をもとに広がりを見せるのである⁴⁾。

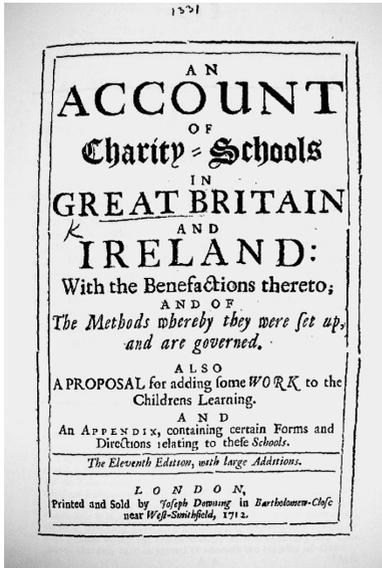
SPCKの役割

ジョーンズは、当時は庶民の子弟のためのさまざまな学校を「はっきりした名称の使い分けや区分をせずに、英語学校、初等学校、無月謝学校、非古典学校、教理問答学校、慈善学校などと呼んでいたが、それらの設立運動は単一の運動であった⁵⁾」としている。そしてその「運動」に大きく関わったのが1699年にシェルドンの主任司祭トマス・ブレイ

など英国教会の聖職者を中心に結成された SPCK である⁶⁾。『イギリス社会史』(1944)の著者ジョージ・マコーリー・トレヴェリアンは世紀転換期のウィリアム 3 世とアン女王治世を「純粹に宗教的な活動と宗教復興がみられた」「将来の大発展の種を蒔いた」時期であるとし、「今日われわれが慈善学校や「キリスト教知識普及協会」をもっているのはこの時代のお蔭である⁷⁾」と言う。一般に慈善学校と SPCK は一組のものとして捉えられているのである。

すでに王政復古後にも、貧しい子供のために、おもに富者による寄付基金や遺贈などによって設立され、教会区委員会や臨時学校理事によって管理される学校があった。しかし 1685 年頃以降になると、ロンドンの多くの教会区で学校の資金を地元民の学校支援会費によってまかなう方法が考案され、寄付金拠出者委員会によって経営される慈善学校が一般化した⁸⁾。慈善学校と称される最初のもは 1680 年に創設されたロンドンのホワイトチャペル校であるとされる。そして SPCK が当初に採ったのがこの経営方式であった。慈善学校の発展に SPCK が大きな影響を与えるようになったのは、この方式を基本として、学校の新設や既存の学校の運営などについての助言を与え、寄付を募るための宣伝活動を盛んに行うことによってであった。多くの教会区では大口の寄付は望めず、学校の資金はおもに支援会費と説教後の募金によるものであった。大聖堂や各教会区の教会で、学校支援会員や寄付を募ることを目的とした説教が、毎年、季節ごと、あるいは毎月行われたのである。後でも触れる生徒の学習指導書『クリスチヤンの生徒』(c. 1702)の著者でロンドンのセント・ボトルフ教会主任司祭ホワイト・ケネットもしばしば同趣旨の説教を行っている⁹⁾。

SPCK の当初の大きな目的は、1699 年 3 月 8 日に開かれた創設会議の議事録によれば、ロンドンおよびその周辺の各教会区に教理問答学校を設立する計画を立て、貧困階層の子供たちに読み方を教え、英国教の教理に基づいて教育を行うことであった。学校建設のための寄付申込書には、それらの学校の目的が、慈善寄付によって「貧しい子供たちに英国教会が説くキリスト教の知識と実践を学ばせる」こと、また「生徒の境遇や能力にふさわしいそれ以外のことを教える」ことであるとの趣意が明示されている¹⁰⁾。「それ以外のこと」とは読み方、書き方、算数、会計、あるいは女子のための裁縫などである。「慈善学校」という名称



『慈善学校報告』第11版(1712)扉

「協会は奨励し、助言を与え、調査し、報告した。安価な聖書、祈祷書、教理問答書を出版するが、直接的な金銭的な援助は、地元の学校支援会費に一時的な欠損があった場合のみであり、その際は予備基金で支弁した。」¹¹⁾

初期慈善学校の発展

SPCKの各地の通信員の報告に基づく統計によれば、1704までにロンドンとウェストミンスター¹²⁾の32の教会区に学校が設立され、そのうち12の教会区には2校以上あったという。総計54の学校が設立され、それまで就学の機会のなかった同地域の2,000人以上の子供たちがおもりにリーディングを、また時にライティングや算数などの教育を受けた。1705年の報告ではロンドンに56校あり、生徒数は男子1,462、女子775であった。1729年には132校で5,225人の生徒が学んだとされる。イングランド全体についての初期の報告では、学校数は1,099、生徒数は男子18,136、女子2,170であった。1730年には1,318校、男子19,348、女子3,911、その5年後の報告では1,329校、男子19,506、女子3,915であ

が慈善寄付によって設立・運営される貧民の子供のための学校のいわば総称として一般化したのは同協会の活動の結果であるとも言える。貧しい子供の教育の必要を訴える説教は協会の出版物として販売された。またSPCKが支援する各地の慈善学校に関する情報が通信員から寄せられ、年次報告書として出版された。SPCKの具体的な役割については『18世紀の貧民教育』(1908)の著者デイヴィッド・サーモンが次のようにまとめている。「学校は地元の人々によって開かれ、支援され、経営されるべき」であり、「

る。クレイグ・ローズが記すように、1711年以降は建設数の増加率は急激に縮小した¹²⁾。1780年のロンドンでは164校、男子3,544、女子2,498である。また、生徒の男女比に当初から見られた不均衡は最後まで是正されなかった。ちなみに1730年のイングランドの人口推計値は527万人ほどである。学齢児童数は不明だが、先に見たSPCKの統計による全国で25,000人程度という慈善学校生徒数は明らかにそのごく一部に過ぎなかったことも分かる¹³⁾。それ以外の種類の学校で読み書きを習った生徒も少なからず存在した¹⁴⁾。

一方慈善学校には、いまだ英国教が浸透していないイングランド以外のブリテン島各地域およびアイルランドを文化的に統合する役割が担われていた。そのために英国教の教義を学ばせるとともに、アース語もしくはゲール語などの現地語を否定し、英語を習得させることが必須であった。ジョーンズはこの経緯についても『慈善学校運動』第2部で詳細に論じている。いくつかの統計的数値を挙げておく。スコットランドでは1707年のスコットランド合同の2年後にSPCKスコットランド支部が発足し、スコットランド教会の支援を受けて、1711年に最初の5校が設立されたあと、世紀半ばまでに150校へと発展した。アイルランドでは1704年にダブリンに最初の学校が建てられ、1717年までに、ダブリンだけで15校を数えた。その後、1725年までには、全体で163校、生徒数3,000ほどにまでなった¹⁵⁾。

ただし本節で挙げた学校数、生徒数についての数値は必ずしも正確なものとは言えない。次節で言及するロバート・アンウィンも指摘するように、SPCKの統計は各通信員の報告に基づくものであり、その調査の時期、頻度、方法も明らかではないからである。

「慈善学校運動」の再検討

1970年頃以降、教育史においては「慈善学校」の定義についての再検討と、18世紀初頭の地域ごとの慈善学校の発展とそれへのSPCKの関与についての検証の必要が議論されるようになっていく。論文「英国教会と貧民の学校教育—1699年から1720年までのSPCKの役割」(1984)の著者ロバート・アンウィンによれば、論点は、1. 特にロンドン以外の地域での慈善学校の発展についてはより多くの検証が必要であ

ること、2. SPCK 結成以前から慈善による学校教育は行われていたこと、3. それぞれの地方における SPCK の関与についての比較検討が必要であること、4. SPCK の年次報告書には特に地方の学校についての記載上の不備や不徹底が見られ、再検証が必要であることなどである¹⁶⁾。

SPCK が 18 世紀の慈善学校教育に果たした全般的な役割に異論はなくとも、それが世紀転換期以降 18 世紀を通しての「運動」を主導し成果をあげたとする見方については具体的な検討が必要であると考えられたのである。ジョウアン・サイモンはその論文「慈善学校運動はあったか？—レスター州検証」（1968）で、設立の時期や趣旨、あるいは教会区の規模などの各地域の事情を考慮に入れくわしく見ると、ジョーンズの挙げるさまざまな名で呼ばれる学校はそれぞれかなり違った性格を持っており、決して全体を SPCK 主導の「運動」のなかに括ることはできないと言う。たとえば初等学校、非古典学校などの名称は時代をくだって用いられるようになったと指摘している。アンウィンも協会の結成以前からすでに全国各地で慈善学校教育が行われていたのは明らかであるとしている。たとえば、SPCK の通信員が、90 年代にうまくいっていなかった慈善教育の活動方法が同協会結成後は刷新されたと書いていえると言う¹⁷⁾。SPCK は、慈善学校を創始したわけではなく、「既存の学校を発展させた」¹⁸⁾ のである。

また、18 世紀を通じて、非国教系の慈善学校も多くの生徒を受け入れていた。たとえば 1714 年創立のロンドン中央部サザックのホースリー＝ダウン校の当初の生徒は男子 40 名であり、85 年からは女子も受け入れた¹⁹⁾。非国教徒の讚美歌作者で読み書き教科書の著者でもあったアイザック・ウォッツはハートフォードシャー、チェズントの学校の設立に肩入れをしたことでも知られる。この学校については、ジョン・イシットが非国教の政治思想家ジェレマイア・ジョイス研究の中で紹介している²⁰⁾。一方、カトリック教徒は学校の運営を禁じられていたが、神父たちは地元民のために読み書きを教えていた。民衆へのカトリックの影響を食い止めることが英国教会系の慈善学校の発展を促したもう 1 つの重要な動機であった。このことについてはアンウィンが別の論考『慈善学校と英国教の防衛—スポフォースの主任司祭ジェイムズ・トールボット 1700-08』（1984）で北ヨークシャー、スポフォースの事例をくわしく考察している²¹⁾。

本節で挙げたいずれの研究も、いくつかはそのタイトルからもわかるように、慈善教育における各地域の個別の事情に注目している。それによって SPCK の関与を含む「運動」の実態へのアプローチがなされているのである。

SPCK の教科書出版事業

SPCK が庶民のための廉価な聖書、祈祷書、教理問答などの出版をその事業の 1 つとしていたことについてはすでにサーモンの言葉を引いて言及した。協会が最初に 1699 年に出版したのはクエーカー教徒から英国教徒に転向した SPCK の活動家ジョージ・キースの教理問答書などであった²²⁾。特に教育に関しては学校の建設や経営への支援とともに、協会はそれらの学校で用いる教師用の手引書や生徒用の教科書の出版に積極的に関った。17 世紀末以降の慈善学校から 18 世紀末の日曜学校へ、さらには 19 世紀初頭以降のイギリス内外学校協会 (The British and Foreign School Society) 校や国民教育協会 (The National Society for Promoting the Education of the Poor in the Principles of the Established Church) 校へと広がる、「長い 18 世紀」における民衆教育の発展において、SPCK の出版した宗教と英語の教科書が果たした役割はきわめて大きい。多くの慈善学校の建設が進み、そこで用いる書の需要が増加したことが 1720 年代に協会の活動のなかで出版事業の重要性がより高まったことの原因の 1 つであったと言えるのである。協会の出版物を発行・販売する業者間に働く競争原理も教科書隆盛の背後にあった²³⁾。

ことに注目すべきなのは先に触れたケニットの慈善学校生徒のための学習の手引書『クリスチャンの生徒』と教師のための指導の手引書であるジェームズ・トールボットの『クリスチャンの教師』(1707)²⁴⁾ の出版である。それらは 18 世紀を通して全国の慈善学校のカリキュラムや指導方法に影響を与えることとなった。それに続けて協会は生徒用の教理問答書、祈祷書、聖書物語集などのほか、綴字教本、基礎文法書など、学校用の多くの教科書の刊行に関与した。なおかつそれらの教科書のいくつかは長期にわたって版を重ね、19 世紀にいたるまで規範的な教科書として全国の学校で用いられたのである。民衆教育における教科としての「英語」の成立の基礎となったと言える。

おわりに

18世紀前半のいわゆる慈善学校の盛んな設立と発展を「運動」と捉えるならば、その主体が何であったが問われる。その際、その学校数や地域的な広がりを考えれば、その中心にSPCKがあったことは間違いない。ただし、その「運動」はジョーンズによれば、18世紀におけるピューリタニズムの実践とも言うべきものであり、教派や社会階層を越えた広範な社会改革的企図の一環としてあった。産業化の進む時代のさまざまな社会的要請を受けてのものであることも明らかである。トレヴェリアンは、当時の宗教復興を背景に18世紀民衆教育の発展の基礎となった慈善の精神と実践を象徴するものとしてSPCKの功績を評価したと言える。SPCKが各教会区を単位として、全国規模で各地域の慈善教育活動を奨励し促進したこと、また安価な教科書などの出版とその全国への配給に関与したことは「運動」のなかで大きな意味を持った。一方、ジョーンズへの批判に基づく1970年前後以降の新しい研究は、より詳細な資料の裏付けのもとに、慈善教育に関する各地域、各校による個別の事情を社会的、政治的な文脈のなかに注意深く置き直すことの必要を教えるものであった。ボランティアと社会階層、各教派の地域活動、行政と教育、帝国の文化的統合など、それぞれの都市、地域によって異なるさまざまな事情や文脈の検討が、SPCKの具体的関与についても含め、慈善学校史研究においては欠かせないことが示唆されているのである。

追記 本稿は平成28年度成城大学特別研究助成（研究課題「イギリス近代の初等英語教科書の研究」）に基づく研究成果の一部である。

注

- 1) Michael Sanderson, *Education, Economic Change and Society in England 1780-1870*, 2nd edn (London, 1991; repr. Cambridge, 1995), p. 2 (M・サンダソン『教育と経済変化-1780-1870年のイングランド』原剛訳、早稲田大学出版部、1993、5-6頁)。M. G. Jones, *The Charity School Movement: A Study of Eighteenth Century Puritanism in Action* (Cambridge, 1938; repr. n. p., 1964) を参照。

- 2) Sarah Lloyd, *Charity and Poverty in England, c. 1680–1820* (Manchester, 2009), pp. 123–30、柘植秀通「英国慈善学校の組織化特性に関する研究(その2)」(『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』、14号、2014年)。
- 3) W. K. Lowther Clarke, *A History of the S. P. C. K.* (London, 1959), pp. 39, 29–30を参照。
- 4) イギリス近代の民衆児童教育一般についての日本における重要な研究に尾形利雄『産業革命期におけるイギリス民衆児童教育の研究』(校倉書房、1964)、佐伯正一『民衆教育の発展—産業革命期イギリスにおけるその実態と問題点に関する研究』(高陵社書店、1967)がある。
- 5) Jones, pp. 20–21.
- 6) 秘書らによって著された公式のSPCK史に *A Chapter in English Church History: Being the Minutes of the Society for Promoting Christian Knowledge for the Years 1698–1704 Together with Abstracts of Correspondents' Letters during Part of the Same Period*, ed. by Edmund McClure (London, 1888); W. O. B. Allen and Edmund McClure, *Two Hundred Years: The History of the Society for Promoting Christian Knowledge, 1698–1898* (London, 1898); W. K. Lowther Clarke, *A History of the S. P. C. K.* (London, 1959) がある。
- 7) G. M. Trevelyan, *English Social History: A Survey of Six Centuries Chaucer to Queen Victoria* (London, 1944; repr. 1958), p. 325 (G・M・トレヴェリアン『イギリス社会史2』、松浦高嶺、今井宏共訳、みすず書房、1983、272頁)。
- 8) John Lawson and Harold Silver, *A Social History of Education in England* (London, 1973), pp. 164–65 (ジョン・ロースン、ハロルド・シルバー『イギリス教育社会史北斗・研究サークル訳、学文社、2007、209頁)を参照。
- 9) Allen and McClure, p. 144; W. M. Jacob, *Lay People and Religion in the Early Eighteenth Century* (Cambridge, 1996), pp. 165–66を参照。[White Kennett], *The Christian Scholar: In Rules and Directions for Children and Youth Sent to English Schools. More Especially Design'd for the Poor Boys, Taught and Cloathed by Charity, in the Parish of St Botolph Aldgate*, 5th edn (London, 1710)。初版発行年は不詳である。同書については拙論「初期チャリティー・スクールのリテラリー・カリキュラム—18世紀イギリスにおける‘English’という教科の成立」(『成城大学短期大学部紀要』第34号、2002年3月。大塚英文学会2001年度大会シンポジウム「18世紀 英文学教育」基調報告原稿改稿)を見よ。
- 10) 議事録は *A Chapter in English Church History*, p.18 所載。‘A Form of a Subscription for a Charity School’, in *Educational Charters and Documents 598 to 1909*, ed. by Arthur F. Leach (Cambridge, 1911), pp. 539–41 所載。
- 11) David Salmon, *The Education of the Poor in the Eighteenth Century*

- (London, 1908), p. 3.
- 12) Craig Rose, 'Evangelical Philanthropy and Anglican Revival: The Charity Schools of Augustan England, 1698-1740', *London Journal*, 16, 1 (1991), 35-65 (p. 36) を参照。
 - 13) Brian R. Mitchell, *British Historical Statistics* (Cambridge, 1988), p. 7 (B・R・ミッチェル編『イギリス歴史統計』犬井正監訳、中村壽男訳、原書房、1995、7頁) を参照。
 - 14) この段落の統計的数値は Jones, p. 57, 225, 227; Dorothy Gardiner, *English Girlhood at School: A Study of Women's Education through Twelve Centuries* (Oxford, 1929), pp. 304-05 を参照。
 - 15) Jones, pp. 176-79 を参照。
 - 16) Robert Unwin, 'The Established Church and the Schooling of the Poor: The Role of the SPCK 1699-1720', in *The Churches and Education: Proceedings of the 1983 Annual Conference of the History of Education Society of Great Britain*, ed. by Vincent Alan McClelland (Evington, 1984), 14-32 (pp. 18-19) を参照。
 - 17) Joan Simon, 'Was There a Charity School Movement?: The Leicestershire Evidence', in *Education in Leicestershire 1540-1940: A Regional Study*, ed. by Brian Simon (Leicester, 1968), pp. 55-100 (p. 56); Unwin, 'Established Church', p. 19 を参照。
 - 18) Clarke, p. 21.
 - 19) *A Brief Account of the Protestant Dissenters' Charity-School, Instituted at Horselydown, M DCC XIV* (London, 1796), p. 3 を参照。
 - 20) John Issitt, *Jeremiah Joyce: Radical, Dissenter and Writer* (Aldershot, 2006), pp. 10-11 を参照。
 - 21) R. W. Unwin, *Charity Schools and the Defence of Anglicanism: James Talbot, Rector of Spofforth 1700-08* (York, 1984). 拙論「イギリス慈善学校のリテラリー・カリキュラム—ジェイムズ・トールボットの教師用手引書『クリスチャン教師』(1707)」(『社会イノベーション研究』第8巻、第2号、2013年、3月) を見よ。
 - 22) Clarke, p. 13 を参照。
 - 23) SPCK の出版物が複数の業者によって出版・販売されたことの意義については、ケンブリッジ大学図書館聖書協会資料室のオウネシマス・ングンドゥ博士にご示唆いただいた。
 - 24) James Talbot, *The Christian School-Mater: or, The Duty of Those Who Are Employ'd in the Publick Instruction of Children: Especially in Charity-Schools* (London, 1707). 前掲の拙論 (2013) を見よ。